本実践・研究から見えてくること

研究協力者　成田　龍一朗
（秋田大学教育文化学部
こども発達・特別支援講座）

道徳科における「自律的な学習者」の実現可能性

本授業では役割演技を中心とした授業が行われた。附属小学校は継続的に役割演技を行ってきており、その授業力の高さは言うまでもない。今回も「嵐」の中を通り抜ける「小鳥」を演じることで、より物語へと入り込める工夫がなされていたように思う。

しかし、同時に今回の校内研修会を通じて、多くの課題が浮き彫りになったのも事実であろう。附属小学校では「自律的な学習者」という研究テーマを掲げ、これを実現すべく熱心に取り組んでいる。この研究テーマ自体は意欲的であり、現代学校教育において重要であるのは言うまでもないが、今回の授業を「自律的な学習者」に照らした際に、実現できている側面は見えてこなかった。これはおそらく、「自律的な学習者」という研究テーマの意味とそれが孕む諸課題を十分に看取できていないことに起因しているように思われる。年度末ということもあり、来年度の飛躍の期待をこめて、以下、仮説ではあるが、筆者なりの「自律的な学習者」理解と、それが孕む諸課題を提示したい。

まず、「自律的な学習者」とはそもそも何か。「主体的な学習者」とは違う。いまさら言うまでもないが、主体とは subject であり、服従の意味にも使われる、権力によって構成されるものだ。つまり、「主体的な学習者」とは教師が要請した姿を生徒たちが演じている姿に過ぎない。「自律」とは似ても似つかない。では、「自律」とは何か。ここで議論を尽くすつもりはないので、簡単に述べたいのだが、「自律」は英語で autonomie である。これは「自治」とも訳される。訳出の仕方は重要ではないが、要するに「自律的な学習者」を実現するには授業そのものを「自分(＝生徒たち)が治める」ことが大前提となる。これは自律でも変わらないだろう。自分(＝生徒たち)が教室や授業を律する必要がある。そのため、「自律的な学習者」を目指すなら、授業の中心は教師ではありえない。むろん、「自律的な学習者」をこのように理解する必然性はない。しかし、附属小学校で「自律」がどのように定位されているか、授業からは見えてこなかった。

一旦筆者の解釈を取るとして、殊に道徳科において「自治的」であることは極めて困難である一方で、最低条件でもあると感じる。道徳科における「主体的な学び」など害悪でしかないだろう。戦中修身の授業の「学習」効果によって特攻隊に多くの子どもが志願していっただろうが、これも「主体的な学習者」を実現した賜物であったのだから。

しかし、そのように理解される「自律的な学習者」を学校教育の現場で実現するのは困難でもある。授業構成の工夫や発問の工夫といった細部の変更だけでこれらの目的が実現で

きるとは到底思えない。そもそも指導要領が要求する「道徳科」という科目の特質上、「自律的」な教育は可能なのだろうか。そもそも「道徳科」の授業で何を目指すべきなのか。単に指導要領に従うだけでよいのか。従来の「道徳科」の授業ではなぜ他律的と言えるのかを自分の言葉で説明できるか。現状の授業形式は適切なのか、教室という空間はどうか、教科書のみを念頭に置いた教材選択は妥当か、指導要領や教科書とにらめっこして授業は作られてはいまいか。これらの問いを各教員が自分自身の頭で考え、ゼロベースで教育を構築する必要があるように思われる。

むろん、これらの課題は附属小学校に限ったわけではない。学校教育それ自体の問題でもあろうし、殊に道徳科においてあらゆる学校教育が強制的に抱えさせられている制度的問題でもある。それら諸課題の超克は容易ではない。しかし、これらの問題は本来教育者が避けることのできない問題である。附属小学校がこのことを意識して真剣に取り組むのであれば、その取り組み自体に価値があるだろう。

附属小学校は本来先進的な教育方法を実現し、それを他の学校に広める役割を果たしてきた。来年度以降の改革を成功させ、その役割を一層強化していくことを切に願う次第である。